

スナメリと海洋環境

瀬戸内海は多様な海洋生態系を維持しており、その中でもスナメリは最上位捕食者であり、海の健全性を示す重要な指標生物です。20世紀の環境悪化によってスナメリの個体数は減少しましたが、採餌場の回復を含む継続的な保全活動により、その回復が促進されています。

スナメリは日本最小のクジラ目で、体長1.5から2メートルです。瀬戸内海の砂底生息域および藻場によって維持される強固な食物連鎖に依存して生きています。海の浅瀬には広大な、アマモやホンダワラの群落が育ち、これらはイカナゴ、イカおよびその他の魚種の隠れ場や産卵場となっています。これらの生息地は稚魚の餌場や避難場所としても機能しており、そうした稚魚はクロダイ、マアナゴ、フグなどのより大きな捕食者の餌となっています。

スナメリはかつてこの地域で一般的に見られました。1930年には、大久野島の西に位置する阿波島周辺の海域が、スナメリの回遊ルートを保護するために国の天然記念物に指定されました。1960年代までは、地元の漁師たちはこれらのクジラ目と共に漁をしていたと伝えられています：スナメリが小魚の群れを追う際、タイおよび大型魚を引き寄せるため、漁師たちはそれらを漁獲していました。しかし、戦後の産業開発により、汚染、浚渫、埋め立てによって重大な生息地の損失が起こりました。これらの活動によってスナメリの個体数が減少しました。

汚染を抑制し海洋環境を保護する法制度、生息地の修復プロジェクト、砂底生息域お

より藻場の再生など、保全への取り組みにより、この傾向は改善に向かっています。近年のスナメリの目撃例の増加は、これらの措置が個体数の回復に好ましい影響を与えていることを示唆しています。